

ヤマトタケルの江戸川渡河伝説

山路直充

はじめに

各地にはさまざまなヤマトタケルの伝説が残り、市川市にも「国府台（こののだい）」の地名起源にヤマトタケルの伝説が残る。むろんこの伝説は、『古事記』や『日本書紀』など古代の文献史料に記されない伝説で、由緒は不明である。しかし、由緒不明を理由に奇譚として無視していいのだろうか。伝説から歴史は考えられないのか。そんな思いから、国府台のヤマトタケル伝説を取り上げることにした。

1. 国府台の地名起源

伝説の地、国府台はどこか 国府台という呼称には、地名のほかに台地そのものを示す場合がある。まず、国府台の位置を示すため、台地の場所を特定しよう。

市川市の地形は、北部が下総台地とその谷間の沖積平野、南部が沖積平野・干拓地・埋立地からなるが、両者の間には砂州（市川砂州）が東西に発達している。

北部の下総台地は、大小さまざまな谷で開析されるので、台地の端は樹枝状に細長く広がる。その台地の端を支台という。国府台は、市域の下総台地のなかでは西端、下総台地全体からみれば南西端の支台（国分台、こくぶんだい）南端にあたる。さらに、国分台南端は小さな谷で東西に開析され、通称として西側を国府台（図1で国衙がある台地）、東側を国分台（図1で国分寺がある台地）と呼んでいる。学術上の国分台と、通称の国府台・国分台があるので注意したいが、市川市の下総台地を示すには通称の方がわかりやすい。本論では通称を用いることにしよう。

国府台南端の西側、弘法寺の墓地の西側には、須和田（すわだ）の一部が小山のように残っている。須和田の小山は本来国府台と地続きであったが、関東大震災後の土砂採取によって台地が分断され現状のようになった。本来、台地としての国府台は須和田の小山まで延び、国分台の南端を覆っていた。国府台は西側に江戸川、南側に真間（まま）川が流れ、崖は急峻である。古代では崖や急斜面のことを「ママ」というが（『時代別国語大辞典上代編』）、市川市では国府台周辺の地名となつて、『万葉集』に詠われた（巻3-431・432・433、巻9-1807・1808、巻14-3349・3369・3384・3385・3387）。「真間」という地名の起源である。